

〈競争〉にさらされる大学

法人化 四歩下がって 一歩前進

白楽 ロックビル はくらく ろっくびる

(お茶の水女子大学理学部生物学科、細胞接着分子の研究を経て、今は、バイオ政治学(人間の幸福のためのバイオ研究はどうか)を研究中。)

筆者はアメリカ、オーストラリア、アジアの諸大学、それに、2006年の半年間はヨーロッパ22カ国・26大学を訪問した。欧米豪亜の諸大学は、どの大学も、その国の根幹で、知の殿堂である。広大なキャンパスに美しい建物が散在し、最新設備を整え、優秀な学生・研究者が集まる。学問の活気と将来を感じる。一方、日本の大学にはこれらのいくつか欠けている。少子化、理科離れ、予算削減、大学タタキで、病んでいる。筆者の勤務する大学は、都心の小規模大学で、理学部、しかも女子大学である。だからなのか、筆者個人の問題なのかよくわからないが、ここ数年、閉塞感があり、大学の居心地が悪くなった。構成員にそう感じさせる組織の将来は暗い。なぜ、教員がそう感じるのか、筆者個人のミクロな環境を心情レベルで書いてみる。

居心地が悪くなったと感じるのは、まず、筆者の年収が減ったことだ。2006年の年収が減った。額は約15万円で、毎月にすれば1万円強だから、たいした額ではない。でも、減った。一生懸命働いてきたのになあ、という気持ちが生じた。

研究費も減った。共通経費を引いた教員研究費は、2004年度は71万円だったが、2005年度は51万円で20万円減った。2006年度は59万円で少し増えたが、2007年度はかなり減額されるとの噂だ。もちろん、外部から競争的資金を獲得するよう強く要請されている。競争的資金を否定し

ないが、競争的資金もよしあしで、獲得に過度な競度を強いられる。配分にも問題も多い。筆者のようなユニークな研究活動を評価する審査員はマレにしかいない。

教育の負担は増えた。法人化に伴う経費削減のため、非常勤講師の数が半減した。学科教員は15人と小規模だ。学科教員だけで生物学の全分野を教育できない。不足分野の充当と、新分野の科目を非常勤講師が担っていた。しかし、筆者が講師をお世話していた科目「免疫生物学」「科学技術論(バイオ知的財産、科学ジャーナリズム)」「生物学史」は削減された。さらに、ここ2年間に学科教員が2人、定年退職したが、その補充は認められていない。3人目退職者の補充も不安視されている。教員15人のうち2(〜3)人が減少した(する)。筆者の授業負担は約5割増えたが、専門外の科目は教育できない。教員が抜けて補充がなければ、教育の質は低下する。

会議も雑用も増えた。増え具合を数値で示すのは難しいが、数割増の印象だ。

書類の量も増えた。といっても、これは法人化のせいじゃない。インターネットが普及して、簡単に電子ファイルが送られてくる。とてもじゃないが、ゼンブ読んでいられない。

欠点ばかり指摘したが、会計事務は大きく改善された。

それで、トータルの変化は、「四歩下がって一歩前進」の印象だ。

一般論として、教育と研究は、教員の「ヤル気」や「熱意」が根幹だ。「構成員に最大限の能力を発揮してもらうにはどうするか？」は、組織として重要な施策だろう。居心地が悪くなった教員は、「最大限の能力を発揮」しにくい。2006年11月に亡くなった大化学者・大瀧仁志先生は「日本の大学はトコトン落ちるしかない。トコトン落ちれば、いずれ復活する。それには20年はかかるでしょう」とおっしゃった。数年程度で、「一歩下がって 四歩前進」にならないだろうか。それじゃ元通り？